

ホトトギス

昭和二十四年三月二十六日運輸省特別換承認誌第六二七号
平成三十年十二月二日発行(第百二十一卷第十二号)

ホトトギス

十二月号



風雅の小筈〔十二〕

廣 太 郎

平成三十年のある酷暑の日、某所で若い句友との句会があり、会の前にメンバーの御一人A氏と何気なく句集の話題になった。以前からよく聞いた話ではあるが、ホトトギス系の人はあまり句集を出したがない、という話にも及び、A氏が印刷関係の仕事にも携わっておられる事も相俟って、積極的に句集を出すのは作者にとってもプラスになるのではないか、という結論にも達したが、私が思うに、最近、ホトトギス系の作家も一時期に比べると句集出版に対する意欲は積極的ではないかとも思っていた。

ところが同じ日に同じ句会のB氏というメンバーが、類句について私に御相談をされた。掻い摘んで言えば、句集を出す時の類句の扱い、という事であったが、B氏はこの話を私にするにあたり、先ず「私は決して句集は出しませんが」という意味の事を前提としておっしゃったのである。余りにも固い決心のようで、しかもB氏はその前に行われた私のA氏との会話を知らないで少しびびったりしたが、ただ、ふと思いついてみると、私がホトトギス社で仕事を始めた頃は、確かに、特に高濱年尾に薫陶を受けた時代の人は、句集を出す事を、私の感想であるが大袈裟に言えばまるで罪悪のように思っているような印象を受けた人も居られたと記憶しているが、これを一概に責めて良いのかと思つた事も事実である。勿論その人も句会等では句を発表して選者をはじめ多くの方の選に入る。極端な例だが、何か音楽会のライブのような臨場感もあって、これも一つの見識ではないだろうか。

句日記 汀子

平成二十九年十二月二日 芦屋ホトトギス会

風邪声に励ます言葉なかりけり
亡き友を偲ぶ師走の会となる
霜月の二人の仲間 偲ぶ会

十二月三日 下朝句会

凧の過ぎたる庭と言はずとも
掃く落葉残す落葉もありぬべし
探しものばかりしてゐる師走かな

十二月四日 ロイヤル俳壇

あなどりてぬしが寒さにつかまりぬ
冬といふ覚悟などまだなかりけり
怪我と聞きせめて寒さをいとはれよ

十二月五日 有恒俳句会

風音を先立てて来し散紅葉
風音の落葉しぐれの中にあり
散るものは散りて瘦せたる冬木かな
寒さうな顔のほぐれて控へ室
鼻すするお風邪ですかと問ふ人も

十二月五日 無名会

枯萩としてとどのふる姿あり
年忘句会はや三度目なりけり
結局は言へざるままに息白し

ここに居る筈の友亡き師走句座
ふり返る日々の淋しさ息白し
一日を三つの句会とて師走
十二月五日 伝俳忘年会

この寒さいたはり合ふもさりげなく
皆寒き顔をほどこきて集ふ会

十二月八日 工業倶楽部

鳩琵琶湖の朝のはじまりし

十二月九日 九州ホトトギス俳句大会前日句会

戻れば忽ち冬の池となる
朝寒を発ちて来しこと忘れつつ
十二月十日 九州ホトトギス同人会

寒さうに歩く人見て冬の旅

十二月十二日 大阪倶楽部

旅の夜の虎落笛とてなつかしく
いとひつつ寒さに処して旅にあり

十二月十二日 綿業倶楽部

旅心寒さに紛れゆきにけり
初雪の便り近づき来たりけり
鳥取は初雪と聞く旅帰り

十二月十二日 綿業倶楽部

言葉にはならぬ邂逅息白し
いつか日の傾く歸路や息白し
遠くより見て近づきぬ冬木立
なほ二三旅を残して師走かな

十二月十四日 清交社

災害の跡の冬ざれ見る旅路
動かざる命ひそめて冬の蝶
小さくとも囲めばクリスマスツリー
快晴といふ心地よき寒さかな

はかりごと師走の会でありしかな
十二月十五日 朝日新春詠

お手つきの一回休みうたかるた
友癒えよ癒えよとて年改る
乗初やいつもの道をなつかしく

十二月十五日 アネモネ句会

山会を今もつづけて漱石忌
又一日無意に過ぎゆく師走かな
東京の寒さといへば覚悟して

十二月二十日 夏潮句会

雪国を発ちて来られし友迎ふ
師走とは思へぬ師走なりしかな
年忘句会といへど常の如

十二月二十日 夏潮句会

納め句座とて部屋飾る花溢れ
恒例の櫻落葉は掃かぬまま
傾く日追はざる家居日短か

十二月二十二日 時雨句会

セーターの身軽さ家居楽しまむ
花溢れすなはち納め句座となる
一年のこの日待たるる冬至かな
クリスマス近しと思ふはかりごと

早々と師走の心納めけり

雑詠 廣太郎 選

出張へ涼しき笑顔送りしに 西宮 本郷桂子
 水打ちて子の帰国待つ宵のはず 同
 黙深し百合の香の黙なほ重し 同
 抽出しにかの日の画帳夏館 神戸 山田佳乃
 重き雲空を動かさず半夏生 同
 重力をとり戻したる海女の足 同
 透明な潮より海月透明に 高松 永森ケイ子
 水母揺れ海底の風揺れてをり 同
 浮き沈み波立つることなき海月 同
 夏蝶の花より水に執しをり 米子 中村襄介
 水だけは軽くならざる登山の荷 同
 瞬きて涼しき楽を奏づべガ 同
 虹消えてうすくれなゐの空残る 龍ヶ崎 今橋眞理子
 夕焼見るうちに背中 of 暮れてをり 同
 丸の内抜け銀座へと灯涼し 同
 山寺に棲みつく守宮ほか獣 長岡 安原 葉
 網戸より網戸へ山の風の部屋 同
 日本の梅雨に濡れ咲くジャカランダ 同

天地の梅雨分けて行く傘一つ 相模原 木村享史
 虚子よりも生きて我あり明易し 同
 天平も昭和もきのふ明易し 同
 日没の少し早まりても残暑 京都 山崎貴子
 秋暑し預りし子が熱を出し 同
 とびきりの香水つける日でありて 同
 夏山の高さに空母入港す 神戸 藤井啓子
 アメリカの海の色なる艦涼し 同
 露涼しあの日のままの羅針盤 同
 平和守る大和言葉の艦涼し 同
 夏潮や基地めく艦の入港す 同
 波尖り風尖り晩夏の港 同
 海の日も休めぬ海上保安庁 東京 大久保白村
 サッカーの前半終り氷菓子 同
 ビフテキの後の氷菓に憩ひけり 同
 船 虫 や 鞆 の 女 の 梳 る 福山 竹下陶子
 日除までしてもてなしてくれにけり 同
 星空を逆落したる蛍かな 同
 短夜の少しがたつくバーの椅子 同
 冷酒酌む少し淋しき唇に 同
 冷酒酌む少し淋しき唇に 同
 拳玉の投げ捨ててある夏座敷 同
 雨こぼしつづつ白南風の空となる 袋井 湖東紀子
 一筋の日矢を乗せたる蜥蜴かな 同
 喧騒の夜風に変はる網戸かな 同

雑詠句評(十一月号より)

曇天に生るる空色石鹼玉 渋川 山本素竹

喜びの汗の額や新司教 大阪 酒井湧水

春の季節となっている石鹼玉の遊びは、幼児の遊びとして一年中楽しませている。特に見かけるのは春祭や夏祭の出店の屋台で購入したもので遊んでいる子ども達の姿である。

石鹼玉の液も色々改良され石鹼水を加工したものが多く、ストローで吹くものから、液に輪っかを浸して引き上げると大きな石鹼玉を作る大人の遊びもある。

掲句は、春先の天候がはつきりしない時、子ども達と戯れに吹いて出来た石鹼玉が空中を流れて行くときに、光と角度の変化の中に青空の色を見つけたのである。ごく普通の光景を描写した御句である。(静龍)

春の長閑な空に向かって吹く石鹼玉は、鮮やかな色を大空に放ちながらふわふわと飛んでゆく。それだけでも春の季節としての面目躍如たるものがあるが、この日は曇天であり、少し空の色も暗かったのだが、石鹼玉によってその春の空色が甦ったのだ。明るい季節の姿が見事に表現されている。(廣太郎)

ホトトギス同人の酒井湧水神父様がカトリック大阪大司教区の司教となられた。俳人の中から司教への抜擢されたことに教区の信者、そして俳人一同その喜びはひとしおである。叙階式が七月十六日に大阪カテドラル聖マリア大聖堂で荘厳に行われ、式には二千人を超える信者や関係者で大聖堂が埋め尽くされた。二千人の汗と共に叙階式の中で誓われた「喜びの汗」に深い感慨が伝わる。新司教としての「汗の額」の措辞の中にはこれからのカトリック教会の重鎮としての気概と誇りと責任を担う実感が込められている。心よりお慶びを申し上げたい。(むつみ)

平成三十年七月十六日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂で、二人の新司教様の叙階式があった。その御一人が、何を隠そう作者の酒井湧水師なのである。当日は酷暑で、冷房のないカテドラルでのミサには筆者も与ったが、汗を物ともしない喜びに満たされた式の様子が如実に伝わってくる。(廣太郎)

天地有情

祈りつつ心鎮める星月夜 西宮 本郷桂子
 ペルセウス流星に乗り帰り来よ 同
 花桐や娘きれいに育ちたる 神戸 後藤比奈夫
 娘を母の如くに待み老涼し 同
 一樹より囁き初めし花の精 東京 稲畑廣太郎
 散り初めてより饒舌となる桜 同
 日は疾うに沈んでをりし夏至夕べ 長岡 安原 葉
 夏至ははや昨日と過ぎてふとさみし 同
 懐に抱かれ吉野の春惜む 相模原 木村享史
 くつろぎの旅して春を惜むのも 同
 若者の脚の長さよ大南風 熊本 岩岡中正
 炎天の庭石のいよいよ寡黙 同
 東征のごとくに神の渡らるゝ 福山 竹下陶子
 業平といふ名に疲れ花菖蒲 同
 猛暑日々天皇陛下病まると 東京 今井千鶴子
 八月や火星大きく見ゆる夜も 同
 うち仰ぐ月よりの風夜の秋 龍ヶ崎 今橋眞理子
 いづこより夜風に踊囃子乗り 同

銀の匙銀の器に氷菓かな 東京 山田閨子
 手術後のICUに氷菓食ぶ 同
 炎帝の狂ひたまひし暑さとも 神戸 三村純也
 期待できざる夕立を待ちにけり 同
 鯖鮎にやさし湖北の水ならむ 同
 さだめぞと言ふには哀し野分あと 同 和田華凜
 まだ色の残れる落葉そつと踏む 東京 今井肖子
 頬杖をつけば冷たき指の先 同
 海の日に水の怖さとよろこびと 神戸 千原叡子
 逆縁のひと思ひつつ花氷 同
 花氷やがて消えゆくいのちとも 宝塚 水田むつみ
 目的地までの片陰つなぎつつ 同
 ふるさとは曾根崎新地南吹く 神戸 浜崎素粒子
 飴湯を飲んで童心に返らねば 同
 憚らずわが窓になく油蟬 東京 高濱朋子
 ぎんぎんに冷えし器に夏料理 同
 大雨の後の輝き樟若葉 吹田 大橋 暁
 泰山木大いなる香を放つかな 同

金子選